

# 西洋耽溺交流（中）

（体験版）

※

しかし、ついさきほどまで溢れるほどの超絶快楽を身体に打ちこまれ続け、身体がそれを当たり前と受け止め始めた頃、急に快感を中断されてしまったのだから、その身体の疼きは尋常ではない。傍目から見ると滑稽な鬼灯の痴態だが、これは当然の結果なのだ。

一度思い出してしまえば、身体に受けた様々な辱めの数々を肌が勝手に思い起こしてしまい、鬼灯を熱くさせてしまう。

もう、歩くどころか立ち上がることもすらできない。

身体はジクジクと疼き続け、快感に流されまいとする鬼灯の精神も限界にまで及んでいた。

(や、やはり・・・一度・・・熱を吐き出さないと・・・)

艶っぽい吐息を吐きながら、鬼灯はゆるゆると手を動かし、着物の上から胸の突起に当たるよう、腕を強く押し付けた。

「はあっ!? うああ、んんん・・・っ!」

これまでのかすかな刺激とは違い、明確な感触を感じた胸は、その瞬間予想以上の恍惚を鬼灯にもたらした。

ビクリと身体全体が大きく跳ね上がり、凶らずも身体のあらゆる性感帯が布に擦れ、その感触でも打ちのめされてしまう。

「はあ、はあ、はあっ……！」

(い、いけない、これは……感じすぎるっ)

心はそう警鐘を鳴らすが、一度快感を与えられてしまった身体はすでに暴走し始めていた。腕が再び胸に強く押し付けられ、触られたくてたまらず、疼きまくる突起に布の繊維が擦りつけられる。

「んんっ……も、もうっ……」

(感じすぎて、意識が朦朧とするっ……)

やっつてはいけないという自責の念と、野外で淫らな行為に及んでしまうという背徳感が、余計に官能へと油を注ぎ、身の内に激しい炎を立ち上がらせる。

自らの鼓動する心臓の音が胸を伝わって耳にまで響いてくるほど、身体は興奮し、芯から熱を発して快感に期待を膨らませていた。

「・・・・・・・・・・」

ふと魔がさして、胸に押し付けていた腕をズラし、着物の上から指で軽くひっかいてしまった。

「あああっ!？」

想像以上の衝撃に、細顎を反らし、裏返った甘い声をあげる。

疼きを抑えるために接触したというのに、疼きまくっていた敏感な部位へ更なる愉悦を与えてしまい、貪欲さを上乘せしてしまう。

(こ、こんな、胸だけで、あああ・・・身体が・・・)

一度悦を感じてしまうと、もう止まらない。悪戯に柔らかく愛撫し続けてしまう右胸の突起に、全神経が集中し、受ける刺激を全て極悦へと変換してしまう。

「ああっ・・・ああ・・・んんっ・・・」

最初は触れるか触れないかという程度だったが、次第に腕が巧みに動き始め、着物の上からはつきりと感じ取れるほど硬くなった胸の突起を自らで弄りまわしてしまう。

あまりの心地よさに、鬼灯の紅く色づいた唇から甘い艶声がこぼれ、首元から妖艶な汗を流し始める。

（な、何をしているんだ、私は！早く指を離さないと！指を、指を・・・！）

しかし鬼灯の意思とは反対に、指の動きはどんどん大胆になってゆく。

掌全体を使って撫で回していただだけの愛撫が、はつきりと硬くどがった先端に指を這わせ、恐る恐る親指と人差し指の間に挟んで軽くつまんでしまう。

その瞬間、身体を中心に電流が駆け抜けた。

「んぐっ！んんんんっ・・・！」

とつさに襟元を口にはさんで叫びを抑えたが、情欲の虜になっている身体が、ビクンビクンと何度も波打つ。

(指を離せ、離すんだ・・・！)

鬼灯の理性が必死に身体を言い聞かせようとするが、指の力はジワジワと強くなってゆく。まるで弱火から強火に火力が増してゆくかのように快感は加速し、心臓の鼓動が高まって、胸で弾ける快感を止めることができない。

胸の快感が背筋を通って腰にまで伝達した瞬間、涎が出そうな恍惚感がこみ上げ、鬼灯は無意識に指を強くつまんでしまう。

「っん！くうううう！」

その瞬間目の裏で火花が弾け、上半身が何度もビクビクと痙攣し、身体の芯までトロかすような強烈な愉悦が胸から身体中へ染み渡ってゆく。

それは理性も羞恥も白く染められてしまうほどの甘美な痺れだった。

身体が瞬間的に熱を孕み、毛孔から一気に吐き出されると、鬼灯はようやくやく我に返ることができた。

身体が緊張から解き放たれ、弛緩した身体の重さがどっと押し掛かる。

肩を上下させて激しい呼吸をしながら、鬼灯は今しがた自分の身に起こった状況を飲み込めずにいた。

身体の芯までトロける激しい激感が上半身を突き刺し、鬼灯の意識を吹き飛ばした。

(まさか、たったこれだけの刺激で・・・イッた・・・?)

いくら敏感になっているとはいえ、ただ軽くつまんだだけで胸の絶頂を迎えるなど、自分でも信じられない鋭敏さと醜態だった。

しかも、一度絶頂を迎えたというのに、局地の疼きは止まるどころかささらに快感を求めて激しく疼き始める。

「うつ・・・うつ・・・つ」

連続絶頂が当たり前の状態で何時間も廻られ続け、媚薬づけにされたこの身体が、異常な反応を示すのは当然だった。

胸の絶頂を迎えたことで身体中の性感が目覚めたように一斉に疼きの激しさを一段階上げ、鬼灯の意識へもつと快感を、と切実な訴えをし始める。

こうなれば、揺れる髪にかかる耳すら敏感に、身体に打ち付ける夜風さえ鬼灯を発情させる道具へと成り替わってしまう。

（私の身体っ・・・！こんな、浅ましすぎるっ・・・！）

しかし、どんなに歯を食いしばっても、身体の中を暴れ回る激しい劣情の炎は鎮火する気配が一切無い。絶頂した右胸はもちろん、片方が絶頂を極めたことで肌が逸り、ますます焦れつつたさが増してしまう。

劣情にかられて、つい、もう片方の突起にも腕を押し付けると、思わずため息が出そうなほどの快感美が駆け巡る。

着物の上からみどかしそうに指を這わせ、確かに尖った胸の突起を確認すると、止める意識もなく指が恐る恐る触れ、ゆっくりとこね回してしまう。

「ふああ・・・あっ・・・ああ・・・」

ゾクゾクと背中にまで快感が走り、紅く開いた小さな口から灼熱の吐息と共に、聞くものを虜にする艶声を漏らしてしまう。



先ほどのように一気に刺激を与えれば、たちまちのうちに絶頂に至るだろうが、それを牽制する心はそれを拒み、逆に絶頂寸前の最も気持ちが良い感触をジリジリと続ける状態になってしまう。

「んっ・・・んっ・・・」

甘えたような裏返った吐息が鼻にかかって零れ、肌を擦れる快感を我慢しながら着付けなおした着流しが、再び乱れようとしている。

その隙間から覗く白い肌からむせかえるような色香が漂い、上気して頬をうっすら染め、涙を浮かべて快楽に耽溺しながら耐える姿は、目撃する者がいればむしやぶりつかずにはいられないほどの尋常ではない凄艶さだった。

（もう、頭がどうにかなりそうです・・・なんとか、身体の熱を吐き出さないと・・・）

身体の熱を吐き出す・・・それは、言葉どおり絶頂して疼く快感を収める行為に他ならなかったが、そのためには、分厚い羞恥の壁と鬼灯の矜持がそれを拒み続けている。

両胸の性感が快感の為、打ち上げられた魚のように暴れまわり、悪戯に触れる布地の感触がたまらない。

何度もこぼれそうになる涎を飲み込みながら、両の突起を刺激する行為だけは、どうしても止めることが出来ずにいた。

「んんっ・・・あ、はああ・・・いけない、こんな・・・」

吐息交じりの声が静かな夜に溶け込み、青い月の薄明かりが鬼灯を照らしている。

煉瓦づくりの建物に背中を預け、自分の身体を、意思に反して戸惑いながら愛撫してしまう黒い着流し姿の麗人の周辺には、匂い立つほどの濃厚な色香が立ち込め始めていた。

カリ、と左を撫でさすっていた指が突起に爪をひっかけてしまい、その瞬間、胸の内側で強力な電流が走る。

「あああっ！」

突然の確かな愛撫に驚愕と共に、瞬間的に愉悦が流れた下半身へ手を伸ばしてしまう。

「ひぐっ・・・！」

着物越したが、確実に最も疼く性感帯に触れてしまった衝撃は鮮烈そのもので、鬼灯の理性を打ちのめすほどの激感が炸裂した。

自身はドクドクと脈動を繰り返し、我ながら激しく濡れ、淫液が器官を伝う感触すら、鬼灯を追い詰める刺激となってしまうている。

(ここは、ここはいけない、触れては・・・でも、ここをどうにかしないと、立てない・・・)

恐らく意図して触れてしまったら、その強烈な快感に抗える可能性は低いだろう。

しかし、腰へ溜まりに溜まった熱をどうにかしなければ、逃げることも立ち上がることもできない。なにより、鬼灯の身体が、これ以上の確実な快感を欲しがって狂おしく焦がれている。

「んっ・・・くうう・・・っ」

生唾を飲み込み、息を吐いて、鬼灯は着物越しに手を添えられたままの自身への接触を試みる。

「うああっ！」

指の腹で少し強めに押しただけで、下半身全体が跳ね上がるほどの激感が走る。灼けつきそうなほどに焦がれている部分を刺激したことで再び身体中の肌が泡立ち、涙が出そうなほどの愉悦が全身を覆ってゆく。

「ふあ、はあ、あ、あ、ああ……」

両膝を立てて脚を開き、その中心へと手を添えて、指の腹で何度も器官を押し、刺激する。鬼灯自身は完全に反応しきり、蹶る指先に確かな弾力を伝え、先端から流れる先走りの淫液が、襦袢の裏をみるみる生暖かく濡らしてゆく。

(んっ……着物が……汚れる……)

身体中に欲情の炸裂弾を詰め込まれながらも、僅かに働く鬼灯の理性が、衣服の汚れを今更気に咎めるとは滑稽な展開だった。

そんなちぐはぐな状況に頓着することなく、鬼灯は着流しの裾をスルスルと開き、白く長い美脚と共に、快感の源となっている自身をさらけ出す。

「ふっ……ううう……」

瑞々しく、眩いほど白い大腿が徐々に黒い着物の内から姿を現し、両足の付け根まで大胆にさらけ出される。  
見たくは無かったが、一瞬自分の瞳に映ったのは、浅ましく全身を濡らして上を向く、自らの薄桃の半身だった。

「んっ・・・んん・・・」

最も敏感な性感帯を覆うものが取り払われ、わずかな夜風がその器官を撫で行き、それだけでも湧き上がってくる妖しい感覚に、鬼灯は目を瞑って耐えた。

下履きや股布は奪われ、裸の下半身が青い月明かりに照らされる。  
つい淫魔たちにそこを舐られた数々の感触を思い出してしまい、鬼灯は背筋を震わせた。

(こんな汚らわしい記憶で、頭がどうにかなってしまいそうなんて・・・)

紅い唇から艶めいた息を吐き、屈辱に眉を寄せる。しかし、その憎悪も欲情に焦がされた身体の前では、理性を奮い立たせる道具にはならなかった。

興奮を堪えて息をのみ、鬼灯は戸惑いがちに右手を両足の間へと伸ばしてゆく。

(こんなことなどっ・・・望んでいませんが・・・)

しかし欲情が限界に達している身体は、これから与えられる快感を欲して肌の下で暴れ狂っている。覚悟を決めてそのまま手を伸ばし、鬼灯は自身の熱に指先を触れさせた。

「んっ・・・！」

三本の指が自身の茎に触れ、その途端、指先の暖かい感触と、甘やかな痺れが下半身に走った。ぞく、ぞく・・・と鬼灯の身体が戦慄き、盛大な嬌声をあげてしまいそうな衝動に駆られた。

心臓と下半身がつながっているかのように互いが激しく脈動を繰り返し、一度与えられた愉悦を、さらに求めて気分がどんどん高まってゆく。

もう一度息を呑み、今度は指先を先端に向かってゆっくりと滑らせる。

「うううつ・・・あつ！あああ!？」

その瞬間、鬼灯の身体の芯に籠っていた欲情の塊が弾け、滑らかな指先の感触を受けた直後、自身の先端から一気に白液が噴出した。

突然の極悦と思ってもよらない達精に、構える余裕もなく鬼灯は快楽を深くむさぼってしまう。

「あつ・・・ああ・・・はああ・・・あつ・・・」

万感の思いで遂げた射精は、強烈すぎる快感で鬼灯の下半身を電撃のように痺れさせた。

芝生の地面に残滓が滴り、熱を発した直後、一瞬理性の戻った鬼灯の頭に取り返しのないことをしてしまった罪悪感がよぎる。

（私は、なんて浅ましいことを・・・っ!）

しかし、先ほど絶頂したばかりだというのに、鬼灯の身体は再び加熱し、身体は快楽の欲求の反応を示してしまふ。

しかも、一度絶頂の愉悦を覚えてしまった身体は、さらに快感を欲し、先ほどよりも激しく疼き始めてしまった。

図らずも絶頂してしまった胸の先端も、熱を吐いたばかりの自身も、その奥の触れられていない箇所も、尋常ではないほどにドクドクと脈動し、もっと強烈な刺激がほしくて官能がさらに鋭さを増す。

(ううっ・・・！そんな、そんなっ・・・！)

自分の意思とは無関係に暴走する身体をもてあまし、予想とは真逆の結果を招いてしまった自分の軽率さを悔いる隙もなく、鬼灯の右手は再び両足の間へと伸びてゆく。

しかし、その腕は途中で動きを止められた。驚いて目を向けると、何かが腕に絡みつき、そのままさらに力を込められてゆく。

「ううっ・・・な何だっ・・・これ・・・っ！」



動揺する鬼灯の身体の下、芝生の間から一斉に白い触手が生え伸び、鬼灯の身体に絡みついてゆく。

「うあっ！な、何するんですか！これっ……！やめっ……！」

鬼灯の手足にぐるぐると巻き付き、振り払う間もなく拘束されてしまう。

「くっ……！」

精一杯力を込めるが、身体中が性感帯となってしまうた鬼灯の身体は、触手に身を締め上げられる感触さえ快感に変換してしまい、動けば感じてしまうその身体が、さらに抵抗を阻んだ。

植物の蔦に近い形状をした緑色の触手は、鬼灯の四肢を座ったまま拘束すると、次に妖しげな動きを見せ始めた。

「んんっ！」

蔦の一本が鬼灯の首筋を撫で上げた。その刺激につられて鬼灯の細顎がのけぞり、小さな口から快感のため息が思わず漏れてしまう。

※

責められている胸を突きだし、首をのけぞらせ、身体を硬直させ、鬼灯は胸で絶頂を極めてしまった。

「ああっ！あああああああああ！」

力いっぱい瞑った目じりから涙があふれ、快感を貪ることしか考えられなくなってゆく。快感は上半身全体に広がり、腰を通して下半身の性感帯、両足の足指にまで及び、体中を快楽で痺れさせてしまう。

「うあっ・・・あっ・・・はあ、はあ、んっ・・・うう・・・や、め・・・」

絶頂の頂からようやく降りはじめたところで、再び激しく責められる。鬼灯がいくら嫌がっても、快感に濡れた甘え声で制止の声をあげても、ねだっているようにしか聞こえない。

「あっ！あっ！くる、んんっ！やめ、ああああああっ！」

快感が収まらない内に筆で激しく責めたてられ、再び絶頂感が押し寄せてくる。一度目と比べれば快感の衝撃は薄いですが、それでも、鬼灯の精神を快感で真っ白にしてしまうほどの強力さだった。

筆が再び持ち変えられ、毛ブラシでの愛撫に戻り、ビクビクと感じさせられながら絶頂の高みから降りさせられる。

（いった・・・イッてしまった・・・こんな、こんなヤツらの前で醜態をさらしてしまうなんて・・・）

下半身を責められて無理矢理イカされるのも屈辱だが、男なのに胸で絶頂をむかえさせられてしまう屈辱は一際強かった。

プライドの高い鬼灯にとっては人に見られたくない瞬間の一つで、自分の敏感な身体を呪い、激しい羞恥を感じてしまう。

心は否定しているのに、身体はいまだに絶頂の余韻が支配し、体中に広がる達遂の余波が肌を甘くしびれさせていた。

「ははっ！コイツ、胸でイッたよ！上げえな！」

「やっぱドールだな。普通でこんな感度、ありえねえもんなく」

化粧筆を突起に這わせ、上下に弾きながら兵の一人が、食いつきそうに近寄りながら鬼灯の耳元で囁き立てる。

「んんんっ・・・ちがつっ・・・あぐっ！」

不意に鎖を強く食い込まされ、走る激感に鬼灯の身体が硬直する。

「今度はこつちをイカせつか。自分でわかるか？お前のエロい汁で、鎖がベタベタになってるんだぜ？」

何度も食い込まされ、擦られ、痒む薬と毫拷問用の媚薬の相乗効果で極限まで高ぶった下半身は、鬼灯の意思とはうらはらに強力な刺激を欲して疼きまくっている。

今こうやって、ただ鎖を食い込まされているだけだというのに、ゾクゾクと愉悦が湧き上がり、気を緩めると唾液が口からこぼれそうになってしまう。

「はあ、はあ、も、もう、これ以上、何をやっても無駄です・・・！私はドールでは・・・ありません・・・誰のものでも、ない・・・ですっ・・・」

「まだそんな事言ってるのかよ？じゃ、このエロい身体はなんなんだ？胸だけでイクなんて、普通じゃないぜ？こつちも鎖でいじめられてるつてのに、ピンピンになってるしよオ」

そう言われ、さらに鎖を引っ張られてしまう。

「んんんんっ！そ、そんな、感じてるみたいに・・・言うなっ・・・！」

「感じてるだろーが？気持ちいいんだろう？ええ？」

そう言いながら、兵が鎖をゆらゆらと左右に振り、鬼灯自身に刺激を与えて悶えさせる。

「ふううっ！あっ！ちが、違う、感じてなんかっ・・・い・・・ません・・・っ！」

「ふーん、だったら、これはなんだよ、これは？」

兵の一人が鬼灯自身の先端に指を這わせ、とめどなくあふれている先走りの液を掬い取り、鬼灯の目の前に掲げた。

「ううつ・・・！」

羞恥極まる物を見せつけられ、鬼灯の顔色が、恥ずかしさと怒りで紅く染まる。

指先から滴り落ちるほど絡みついた先走りの液が、部屋の照明に照り返されて光っている。兵はその液体を鬼灯の白い頬に擦りつけ、感じている証拠を突きつけた。

黒髪を振り乱して淫液を飛ばしながら、鬼灯が怒りのこもった眼差しで声を荒げる。

「いい加減にしなさい！私は日本の鬼神で、こちらには研究のために来たのです！ドールなどではありません！」

しかし、周囲の下級悪魔たちは互いに視線を交わしてニヤニヤと笑い、鬼灯の言葉など本気にとる者など一人もいなかった。

「お前、ちよつとうるせーわ。白状する気がないなら、しばらくこいつで黙っておけよ」

「むぐっ！？うぐぐぐっ・・・」

次の言葉をついて出そうになった口を、ギャグボールで遮られ、声をあげることが禁じられてしまう。穴の開いた丸いボール球が舌の先を滑るだけで、まともに声を発することができない。

「んんっ！んぐっ！うぐぐぐっ！んんーっ！」

激しく抵抗の意を示すが、当然下級悪魔たちは頓着しない。

「なあ、これからもっと拷問を激しくするぜ・・・この痒くなる薬、濡れるとさらに効果が上がるってことは、わかったよなあ・・・？」

前髪を掴まれ、無理矢理首を振じって顔を覗き込まれながら、意地の悪い口調で言い含める。

「それを今から、こっちで実感してもらおうぜ・・・。胸とは比べ物にならねえぐらい、感じるぜ？」

「んんっ！んんっ！んんっ！」

胸だけであれほど狂おしい痒みに襲われているというのに、もっとも敏感な部分をさらに痒みでくるわされるなど、考えただけでゾツとする。

(なんとか、なんとか止めさせないとっ・・・！ああ、でも、鎖がくいこんでいるだけで・・・)

両足の間にしっかりと食い込んでいる鎖をクイクイと引っ張られ、それだけで身体が小さく跳ね上がるほどの快感が巻き上がる。

今でも十分泣き出しそうなほどの痒みに襲われているというのに、さらにそれを強力にさせられそうになっているのだ。なんとか脱出の方法を考えようとすると、両胸を責める筆の快感が思考を途切れさせる。

「んぐっ！んんっ！んんっ！」

すでに一度絶頂を貪っている胸は、より敏感になり、鬼灯は激しい痒みに耐えながら筆の感触に晒され、責められ続けている。

(ううっ、たまらない・・・！認めたくないけど、気持ちいいっ・・・！)

両胸で弾ける快感に酔い、これから下半身に施されてしまう仕打ちを忘れてしまう。





「なんだ、そんなに股間を擦られて気持ちいいのか？」

「んっ！んんっ！」

（そんなわけあるか・・・！）

下級悪魔の問いかけに必死に首を左右に振って否定を示すが、鎖で感じる快感は我慢できるほど生易しいものではなく、すぐに意識を持って行かれてしまう。

「くくっ、鎖ズルズルに濡れてるぜ・・・」

「これなら、すぐに薬の効果が表れるな。それにしても、コイツ感じすぎじゃね？」

「淫乱だなあ・・・自分のエロ液でもっと気持ちよくなっちゃうなんてなあ・・・」

（勝手な事をつ・・・ああ、でも、危ない、少しづつ、薬の効果が・・・）



※

兵の一人が新たに電マを二つ取り出し、その先端を突き出されている両胸の突起に当てた。

「んんーっ！んぐっ！ううっ！んんん！」

（イッてる、イッてるのに、そこへの刺激は・・・だめっ・・・！）

ヴヴヴヴ・・・と振動音が鳴り響き、敏感な性感帯である胸の突起を激しく振動させる。会陰の絶頂で身体の神経が極端に敏感になっている最中に、さらに敏感な性感帯を責め上げられ、吊られた身体はさらに激しい痙攣を起こした。

「すげえのけ反ってるよ、こりや、またイキっぱなしかな？」

「エロすぎるぜコイツ・・・。おらおら、もっと良くなれよ・・・」

（も、もう無理だ、気持ち良すぎて、意識が・・・）

快感が極まりすぎると、心がついていけずに意識を失ってしまう。しかし、新たな刺激を与えられてまた目覚めさせられ、イカされてしまう。

この体勢で拘束されてから、一体何度それを繰り返されたか、4回を数えた頃からはもう、覚えていない。

そして今も、快感で意識を薄れさせ、気を失おうとしていたが、その瞬間、自身に鳥肌が立つほどの快感が襲う。

「気持ちいいところは、全部責めてやらないとな・・・」

そう言って、一人の兵が平然と電マを鬼灯自身に押し当てている。

前立腺の絶頂と胸の絶頂。意識を失いかけていた鬼灯は、最も敏感な自身に強烈な刺激を与えられて無理矢理目覚めさせられ、新たに加えられた快感に鬼灯の身体が乱れ狂う。

「うぐぐっ！んぐっ、んん、んふっ・・・！うぐぐううっ！」

（こ、こんな！無理、無理です！もうだめっ・・・）

刺激がほしくてビリビリと疼き続けている自身を、想像以上の刺激で責められ、予想外の快感の上乗せに鬼灯の心が折れる。

自身の先端から勢いよく精を吐き出し、鬼灯の身体が一瞬硬く硬直したかと思うと、その直後、すべての力を身体から抜いてグタリと頭を垂れ、意識を失った。

「なんだ、また気絶したのか」

「何回目だ？何度も何度も昇天しやがって……このエロ悪魔が……」

鬼灯を快感で苦しめていた下級悪魔たちが、電マを身体から離し、愉悦で打ちのめされた鬼灯の肢体を眺め、笑みを浮かべる。

口に嚙まされたギャグボールから唾液の滴る音と、肌から伝い落ちる汗が地面に落ちる音だけが響く。

「そろそろ、白状する気になったかな？」

口に嚙まされていたギャグボールを取り去ると、僅かに開かれた淫らな紅い唇が現れる。

そこから吐き出される熱い吐息は、当てられたものをすぐさま欲情させる色香に満ちていた。

「よし、起こしてやれ！」

三本の電マが鬼灯自身に一斉に押し当てられ、ヴヴヴヴ、と激しい振動音を鳴り響かせる。突然の強烈な刺激に鬼灯は一瞬で目を覚まし、続けられる快樂責めに、自由になった口から悅樂の声を張り上げた。

「あああああっ！も、もう、やめ、ああっ！ああああ！イク、イクっ……！」

先ほどの鎖責めや兵たちの指の動きとは比べ物にならない激しい振動という刺激に、普段は冷静沈着が心身ともに張り付いたような鬼灯が、汗を迸らし、耐え難い快感に艶声をあげる。

「んんっ！んんっ！ああああ・・・っ！」

喘ぎ声から一層甘い響きが入り交り、鬼灯は我慢することもできず電マの振動によって絶頂させられてしまった。

拷問用の媚薬で高められた部分を激しく暴かれ、さらに痒み薬を塗りこめられた部分を強烈に刺激されるのは、頭の神経が妬き切れるほどの愉悅と衝撃を鬼灯に与え続ける。

深い絶頂感をやり過ぎ、達精を終えて少し冷静になった頭で、鬼灯は必死で考える。

（これ以上拷問されても無意味だ・・・なんとかこいつらを説得させないと・・・でも、私の話など全く聞く耳を持たない。一体どうやって拷問をやめさせられるのだろうか・・・）

ここまで快感で責められ続け、まともな意識を保っているだけでも称賛ものだといふのに、鬼灯は冷静に理性を働かせ、未だに脱出の手段を模索していた。

鬼灯の身体が、感じやすい割に、強烈な快感に耐えきれぬ身体であることが幸いし、快樂に対して並外れた耐性を持っているが故だった。

「ううっ・・・あなたたち、後でどうなっても・・・っ知りませんよっ・・・！あああ！」

再び自身に電マを当てられ、快感を食うだけの神経が密集している部分が激しく反応し、鬼灯の頭に激悦の信号を伝えてくる。

快樂の刺激が欲しくてビリビリとしている表面を、激しい振動で責められて悶えない者はいない。しゃべりかけた鬼灯の声は快感でふさがれ、イクことしか考えられなくなってしまう。



(悔しい、こんな器具ごときで、こんなに感じらせてしまうなんて・・・！)

容赦のない快感の振動が性感帯を強烈に刺激し、鬼灯は愉悦の波にのまれて、またもや意識せず射精してしまう。

「んぐっ・・・うううっ！」

乱発しているかのように見える絶頂だが、その一つ一つは、人間ならば一度迎えただけで気を失ってしまふほどの深い快感だ。

意識が持つて行かれるほどの激しい快感に、目の前で数知れず白い閃光が走る。立て続けに起こった後には黒い闇にのしかかられ、意識を失う。しかし、すぐに敏感な部分への責めで強制的に目を覚まされてしまう。

「おいおい、気持ちよくてまた昇天か？お前拷問されてるんだぞ？とんだドMだなー」

徹底的に快楽の責めを続けられ、脱出を試みる鬼灯の頭もまともに働かない。

(ううっ・・・せめて、少し休ませて・・・ほしいですねっ・・・)

口から灼熱の吐息を吐きながら、快樂でぼんやりとした頭で思考を巡らせる。目にはアイマスクをかけられ、周囲の状況を伺うことができない。その不安さが、逆に鬼灯の身体を敏感にさせ、快感への刺激をより感じるようにさせている。

「ふああ・・・っ・・・ああ、んっ、んんっ・・・！んぐっ・・・ふはっ・・・はあ、はあ・・・」

身体で感じる一方的な快感も屈辱だが、戯れに唇を重ねられ、口腔に舌を入れられることが最も耐え難い。周囲でクスクスと失笑が起こり、ますます鬼灯の矜持に針を刺してゆく。

「俺のテク、なかなかだろ？」

先ほど口づけていたであろう下級悪魔が、おどけた声で話かけてくる。鬼灯は口に唾を貯め、見えないながら、声の方向へ唾を吐きかけた。

すると周囲から爆笑が起こり、その兵を慰める声や囁し立てる声が巻き上がった。

「お前は本当に、どこまでも可愛くて憎ったらしいヤツだぜ・・・」

「はあ、はあ、それは、どうもっ……！」

身体中を走る快感に耐えながら、鬼灯も負けじと憎まれ口を返す。

しかし、身を焦がす快感を欲する激しい欲も、痒みを耐える忍耐力も限界だった。

このままベッドの上に押さえつけられて、思うさま身体中を蹂躪され、飽きるほど絶頂させられればどんなにか……

(い、いけない！)

無意識に湧き上がった自らの願望に、鬼灯はギリギリのところまで杭を打った。

部屋を抜け出す前は、七人の上級淫魔たちに、それこそ自由に扱われ、神経が焼け焦げるほどの強烈な快感を与えられ続けていた。

それは激しく、乱暴で、繊細で、強引で、丁寧で、ぞくぞくして、頭が真っ白になって、何も考えられなくなった数時間だった。

「んんっ……ぐう……」

思い出してはいけないのに、身体は上級淫魔たちに舐られた感触をしっかりと刻み込んでいて、欲に狂い始めた鬼灯の肌の裏をジクジクと蝕んでゆく。

(ううっ・・・痒い、痒くて、身体が気持ちいいことに抗えない・・・っ)

つい弱音を吐きそうになる自身の心を叱咤し、鬼灯はなけなしの理性を取り戻す。

「こいつ中々へばらねえなあ・・・」

「図太い神経だぜ。おらっ・・・!」

下級悪魔の声と共に、持ち上げられた臀部の中心に冷たい何かが押し当てられる感覚が生じた。そこを責められるのは三回目だ。これまでにされた焼け付くような激感を反射的に思いだし、必死に拒絶の言葉を叫ぶ。

「やっ! やめて、止めなさい! そこは、そこはあぁっ!」

冷静沈着な態度をくずさない美貌の鬼神が、突如焦りきった態度を見せ、周囲の兵たちの笑みが深くなる。ツバを吐きかけられた下級悪魔は、当然鬼灯の意思など無視して、後ろにあてがった性具を突き入れた。

「んぐっ・・・！うあ、ああああああつ！」

十連パールが連なった性具を中ほどまで突き入れられ、衝撃と言えるほどの激感が洞内で巻き起こる。パールの一粒一粒はピンポン玉を一回り小さくしたものと大きさは大したことはないが、媚薬を打たれ、痒み薬をふんだんに打ちこまれた洞内を刺激するには、十分すぎる性感道具だった。

「あっ・・・あ・・・ああつ・・・！」

一度突き入れられただけだというのに、鬼灯の頭は後悦で真っ白になってしまった。

洞内を荒らされなくとも、過剰に薬を打ちこまれた洞内は常に気が狂いそうなほどに疼き続け、自身や会陰を責める電マから伝わる振動だけで、涎がでそうなほどの快感を拾っていた。

その部分を直接刺激されて、平静を保つことなどではしない。

透明の珠の連なりをつきいれられ、圧迫感もさほどないというのに、刺激を欲してたまらなかつたそこは意思とは無関係にグニグニとうごめき、侵入した異物を銜え込んで、自分の動きだけで勝手に感じまくっていた。

「へへっ、ここにブチこむと一気にエロくなるよな・・・」

「本性むき出しってヤツだな」

「おらおら、もっとアンアン啼きやがれ！」

性具を突き入れた下級悪魔が、中に入りきっていない部分を掴み、ゆっくりと上下にこね回す。

「はああああっ！やめ、やっ・・・ああああ！はあ、はあっ！」

痒みと性的刺激を欲してたまらない場所を刺激され、身も世もなく鬼灯が乱れる。

鬼灯の身体を吊り下げた鎖がキリキリと音を立て、金属の擦れる不協和音がたちまち大きくなる。淫靡な濡れ音を出しながら、後ろに挿入された性具が上下に抜き差しされる。

※

射精の快感で全身に火がつき、触れられていない上半身も刺激を求め、切ない気分が高まっていた時だった。望んでいるのに望んでいない快感に、思わず声を上げてしまう。しかも、リングの内側には猫の舌のような強度の極小ブラシがびっしりと植え込まれていて、ザリザリとした感触で胸の突起を責めていた。

「ほら、スイッチオン・・・」

下級悪魔の指がリングを一撫ですると、リングは回転を始め、神経がむき出しになっているほど快感に敏感になった部分を容赦なく擦り始めた。

「うあつ！あああああつ！止め、あつ！止めなさつ・・・ううつ、あつ！はああつ！」

快感の疼きと同時に、強烈な痒みにも襲われていたその部分に、この刺激は魅力的すぎた。

(きつすぎるっ・・・！刺激が強すぎて・・・っ！体の、反応が・・・っ、抑えられない！)

しかし、リングはそんな鬼灯の戸惑いなど露知らず、一定の速さを保持したまま、充血しきった突起を磨き上げてゆく。

腰に与えられる快感が相乗効果となり、胸の快感がどんどん加速し、ヨダレが出そうなほど甘い感覚に脳がとろけそうになってしまう。

(ううっ！痒いところを、こんなふうに刺激されたらっ・・・！)

猫の舌ほどの硬さをもった毛先がジョリジョリと表面をこすり続け、痒くてたまらない部位を遠慮なく刺激する。体をのけぞらせても、腰をねじっても、この程度では胸のリングは外れてくれない。

「ほら！大人しくしろ。もう一個だ・・・」

肩を掴んで身悶えを止められ、もう片方の突起にもリングをはめられてしまう。

「あぐっ！あああああっ！」

両方の性感帯に甘美極まる刺激を与えられ、鬼灯の切なげな艶声があがる。



片方だけでも総毛立つほどの快感だったというのに、それを両方に取り付けられてしまい、快樂が増大してしまふ。それぞれの刺激が相乗効果で性感を高め合い、ますます敏感になって、鬼灯を快感で苦しめる。

「ううっ！うっ・・・はああああ・・・！」

「急に威勢良く声を出すようになったな」

「胸がそんなに気持ちいいか？」

（気持ちいいですっ！悔しい・・・！ああっ、ゾクゾクして・・・！）

上半身の快感は全身に波及し、最初から責められ続けている自身の性感も高めてゆく。堰が切れたかのように一気に下半身で快感が弾け、あえなく法悦を貪ってしまう。

「ああっ・・・はあ、はあっ・・・んんっ！」

射精の余韻に浸ることも許されず、両胸の刺激が鬼灯の意識を快感で覚醒させる。

酸欠のように口を開き、中で紅い舌を蠢かせる口元が艶かしい。鬼灯の身悶える様に、周囲の兵たちは獲物を見る蛇のような視線を向け、粘ついた欲望を募らせている。

しかし当の鬼灯は彼らの様子どころではなく、体のあちこちで弾けまくる激感に耐えなければならなかった。

「うあつ！あつ！あつ！ああつ……！」

（ま、また胸でイク、はああ……こらえきれない……！）

悲痛な心の叫びも虚しく、上半身の緊張が一気に爆発し、射精とは違う、暖かい湯が布へ染み渡るような絶頂の瞬間が訪れてしまう。

「ああああつ……くあ、あつ……あああ……！」

鬼灯の白いからだは仰け反り、匂い立つ汗が周囲に飛び散った。絶頂したというのに胸のリングは回転の勢いをやめようとしない。絶頂してそのまま刺激され続けければ、いった状態が継続する胸の絶頂は、鬼灯の上半身へいつまでも強烈な快感を縫い止めて逃そうとしない。

「お、イッたみたいだな。射精じゃなくて胸でイッたか？」

「本当に珍しいなあ……。こんな淫乱、久々にみるぜ」

「おらおら、イキ続けると足の重りがどんどん下がっていくぞ？」

「んぐっ……。うっ！うっ！うっ！」

はあはあ、と息をつき、ようやく緩やかなカーブを描いて下降し始めた胸の絶頂から意識を奮い立たせ、自分の体の状態を鑑みる。

足首のクリスタルはズンと重く、両足は完全に直立した体勢になってしまっている。そこへ、自身を刺激する柔らかいバイブが振動を強め、先端を擦る回転数まで上げ始めた。

「あああっ！うっ！はあ、あああ！」

身も世もなく汗を飛ばし、黒髪を振り乱す鬼灯の姿をイヤラシイ視線で眺めながら、下級悪魔たちが鬼灯の射精するまでの絶頂を数え始める。

「ほら、あと三数えるうちにイクか？」

「んぐっ……！バカっですかっ……！」

「ほら、さーん……」

「ふあっ！？あああっ！」

下級悪魔の一人が自身を刺激するバイブをさらに強く押し付け、鬼灯へ逃げ場のない絶頂をぶつけてくる。

「にーい……」

「うっ……！か、数えるなああっ……！」

「いーち……」

快感が強すぎてまともに呂律の回っていない鬼灯を無視し、兵はカウントを続ける。

「ゼロ！ イツていいぜ！ オラ、イケ！」

イケと言われて誰が果てるものか、と鬼灯は抗ったが、体はあっさり裏切った。

絶頂を食う許しをもらい、強烈に刺激されていた下半身が、なんの心構えもなく法悦を食ってしまう。

「あああああ！ つ……！！ うつ……！！」

またもや暖かい精液が股ぐらに流れ込み、自分の失態を他人に見られてしまうという羞恥の極みを披露してしまう。

それよりも、自分の体が全く律することができず、彼らの命令どおりに反応してしまったことが屈辱でならなかった。

両足のクリスタルが重さを増し、さらに食い込みが激しくなる。

「うううつ……！！ ぐつ……！！」

さらに強烈になる食い込みに大腿を震わせ、クリスタルのつけられた足首の先で、足指が反りかえる。

その瞬間、ガクン、と下半身の黒い器具が振動し、新たな変化が現れた。

「あああああつ！んぐつ・・・！うつ・・・！」

先端を責められている鬼灯自身の周囲に、ザワつと芝生のような絨毛が生えそろう、ブラシのように上  
下して、先端のみならず、感じやすい裏筋までを余すところなく掻き擦っている。

先端を責められているだけで十分な刺激だった部分を、さらに責めが追加され、熱い痺れが鬼灯の身体  
を突き抜ける。

絨毛はの硬さは柔らかめのブラシに等しく、ふんだんに怪しげな粘液を含んでいて、濡れると痒みが増  
す鬼灯の肌を否応なく高めてゆく。

どんだん上がる痛痒感に、さらにそこを掻きむしられる強絶な刺激で、鬼灯の意識は一瞬で白く飛んだ。

「ああああああつ！はあ、あつ・・・あ・・・あああ・・・！」

完全に陶醉した艶声をあげ、鬼灯が白い身体を何度ものけぞらせる。

仰け反った胸には無機質なリングが嵌められ、今もその性感帯を休みなく責め続け、絶え間なく快感を  
流し込み続けている。

身体中を快感の汗まみれにし、欲情の芳香をまき散らしながら悶える白い身体は、腰に引っかかっているだけの黒いボロ布と相まって、これ以上ないほどの被虐感と妖艶さを演出していた。鬼灯が身悶えて声をあげる様を眺めている兵達も、次第に欲情で瞳に鋭さが増してきた。中には下半身に手をあてて我慢の様子を見せるものまでいて、下級悪魔たちの鬼灯への激情が隠し通せないほどに膨張し始めている。

「くくっ、気持ちよさそうな声をあげて・・・おら、気持ちいいか？」

一人の兵が鬼灯の肩に手をあて、耳を甘噛みしながら問いかける。

「結構いい声で鳴くじゃねえか、だが、あんまり出しすぎると下品だぜ？」

「ふああっ！あっ・・・！」

背後に近づいた兵が、深く刻まれた白く妖艶な背中の窪みを指先で上下に撫で回し、鬼灯の上半身を痙攣させる。

「こうすると、もっとよくなるからな・・・」

さらにもう一人が増え、ブラシで上下にグシユグシユと擦られながら、先端を振動責めされている自身に手をあて、ブラシへさらに密着するように上から自身を押さえつける。

「うあああああつっ！」

擦られる快感がさらに強烈になり、鬼灯の下半身が火であぶられた蠟のようにトロけていってしまう。一際大きく身体を跳ね上げると、直後先端から愉悦の白液をこぼした。

「ああっ・・・あつ・・・ああああ・・・」

魂さえもそがれるような強烈な快感と絶頂感に、鬼灯が呆然とした声をあげ、熱い吐息を吐く。しかし自身を責める器具は止まる勢いを知らず、変わらぬ調子で最も感じる性感帯を責めつづける。

(い、イッたばかりなのに、この刺激はキツすぎてっ・・・！)

「んっ！んんんっ！」



「またもや下級悪魔が身体に取りつき、ブラシリリングに責められている胸の突起を、リングごと口に含んで、責められていない先端を下で上下に素早く舐められる。カアツと快感の度合いが一気に上がり、胸で迎える頂点が差し迫り、鬼灯は首を激しく後ろへのけぞらせた。」

「うあつ・・・！んんっ！ぐっ・・・！ううううう！」

強烈に責められている自身が再び絶頂し、意識が流される激悦が下半身に迸る。足首のクリスタルがグン、と重みを増し、一段と椅子が両足の間に食い込んで、自身を責めるブラシへの接触も強烈になってしまう。

「おらおら、イキまくってるよ、もっと大変なことになるぞ？」

下品に囓し立てられるが、自身に感じる快感が強烈すぎて、自分でも感覚を律することができない。できるものなら、とづくにしている。

「はあっ！はあっ！はあっ！はああああっ！ああああああ！」

続きは本編でお楽しみください

